

『神学大全』第1部 Q. 14, a. 13 に於る 若干の問題点について

岩 熊 幸 男

『神学大全』I. Q. 14, a. 13 は、‘神は futura contingentia を認識するか’ という問題を扱っている。

我々はここで、この articulus に於る text 解釈上の2つの疑問点に対し、若干の考察を加えたい。その疑問点の第一は、ad II にみえる ‘materia verbi’ 及び ‘pars principalis propositionis’ という語句の解釈を廻る問題である。第二点は、ad III に於る、様相概念の de re, de dicto の2通りの解し方と関連して述べられた、‘divisa’ 及び ‘composita’ という語句の解釈についてである。

第一点について；

ad II に見える次の文

(Quia cum dicitur, Deus scivit esse futurum hoc contingens,) contingens non ponitur ibi nisi ut materia verbi, et non sicut principalis pars propositionis.

..... (命題 I)

は、一見次の様な訳を与えて充分に思われる。「(……) 上の命題中に於て、‘contingens’ という語が置かれている ponitur が、それは言葉の素材としてであつて、文の主要部分 (i.e. 主語又は述語) としてではない。」

主要な近代語訳も、⁽¹⁾ ほぼ同様に解しているらしい。

[D].....so ist der Ausdruck: das ungewisse, nur als Wort zu fassen, nicht als hauptteil des Satzes;.....

[E].....the word ‘contingent’ is merely part of the matter of the proposition and not a principal part:.....

[F].....la contingence qui s’introduit dans la proposition n’en forme que la matière, non la teneur principale et formelle;.....

[S].....lo de contingente se pone aqui como materia del verbo y no como parte principal de la proposición,.....

(但し、上の諸訳に於て、‘*materia verbi*’, ‘*principalis pars propositionis*’ に当てられた訳語が何を指しているのかは、注もなく、やや曖昧である。)

ところで、次の命題について考えてみよう。

contingens est possibile. (命題Ⅱ)

この命題に於ては ‘*contingens*’ という語が、*pars principalis* (の1つ) 即ち主語に置かれていながら、しかも *contingens* な命題とは考えられない。この事から2つの問題点が浮び上る。

i) 命題Ⅰの ‘*contingens*’ は、‘“*contingens*” という語’ と解すべきではないのではないか。

ii) ‘*pars principalis*’ は ‘主語又は述語’ を意味してはいないのではないか。

第i点に関して：Marietti版、Leonina版等、主要なeditionに於て、‘*contingens*’ はイタリックになっており、直前の文

Deus scivit esse futurum hoc contingens. (命題Ⅲ)

の中の ‘“*contingens*’ という語’ と解するように示唆している如くである。しかし、上述の問題点からして、この解釈は採り得ない様に思われる。そこで我々は、この ‘*contingens*’ を ‘*id quod est contingens*’ と解したい。

ところで、命題Ⅲに於る ‘*contingens*’ も、‘*hoc*’ を伴っていることから明らか如く、‘*hoc quod est contingens*’ を指している。それでは、命題Ⅰの ‘*contingens*’ も、この *hoc* を指しているのだろうか。

我々はここで *Summa* 本文に立ち戻って考えてみよう。第2異論は次の様な趣旨であった。——真なる条件文に於て、前提が必然的なら結論も必然的である。しかるに次の命題

si Deus scivit hoc futurum esse, hoc erit. (命題Ⅳ)

は真なる条件文で且前提 (i. e. 命題Ⅲ) は必然的である。従って結論も必然的である。従って神の知は必然的なるものにしか及ばない。——

この異論に対し、*ad II* では4つの異論回答が与えられ、最初の3つは全て Thomas によって否定されている。我々の問題としている命題Ⅰは、その2番目の回答への Thomas の反論の内にある。

最初の回答は、次の様な趣旨であった。——命題Ⅳの前提 (i. e. 命題Ⅲ) は必然

的でない。なぜなら、未来の事に関わっているから。—— Thomas はこれに対し——命題Ⅲは確かに未来の事に関わってはいるが、それが *Deus scivit.....* という過去の事実を述べているのである限り、必然的である——と反論する。

以上を受けて、次の第2の回答が提出されているのであるが、これはいわば第1の回答の修正案になっている。

Alii vero dicunt hoc antecedens (i. e. 命題Ⅲ) esse contingens, quia est compositum ex necessario et contingenti, sicut istud dictum est contingens, Socratem esse hominem album.

さて、いかなる意味で次の命題

Socrates est homo albus. (命題Ⅴ)

は、*compositum ex necessario et contingenti* なのであるか。それは、命題Ⅴの構成要素 *terminus* (*Socrates* 及び *homo albus*) がそれぞれ *necessarium*, *contingens* である、という意味では決してなく、命題Ⅴが次の2つの命題、

*Socrates est homo. [これは *necessarium*]*

*Socrates est albus. [これは *contingens*] (命題Ⅵ)*

を合成 *componere* したものである、という意味である。ここで注意すべきは、*contingens* といい *necessarium* といわれているのは、決して物 (*Ding*, e.g. *Sortes*, *homo*, *albus* etc.) ではなく、命題によって表示されるもの (*res enuntiata*, *Sachverhalt*) である事、である。

さて、命題Ⅴと同様に命題Ⅲも *compositum ex nec. et cont.* である、と言われている。それは、命題Ⅲが次の2つの命題から合成 *componere* されているからであると考えられる。

*Deus scivit. [これは第1の回答への Thomas の反論にある如く *necessarium*]*

hoc contingens futurum est. (命題Ⅶ)

それでは、命題Ⅶはいかに解すべきであるか？ 先に述べた如く、*contingens* であるのは物ではなく *res enuntiata* であるから、ここで命題Ⅶの '*hoc contingens*' の例として、命題Ⅵの *res enuntiata* を考えることにしよう。すると命題Ⅶは次の様になる。

Socrates albus futurus est. (命題Ⅶ')

従って命題Ⅲも次の様になる。

Deus scivit Socratem album futurum esse. (命題Ⅲ')

この命題Ⅲ'に於て contingens であるのは、'Socratem album futurum esse' 即ち命題Ⅲに於る 'hoc contingens futurum esse' であって、命題Ⅲに於る 'hoc contingens' そのものではない。

以上の考察から結論するに、我々は命題Ⅰを次の様に解すべきであると思われる。

「……。上の命題中に於て、contingens なもの (i.e. hoc contingens futurum esse) が考えられている ponitur が、それは materia verbi としてであって、principalis pars propositionis としてではない。」

第 ii 点に関して：命題Ⅱによって提出された問題は、しかし未だ解決されていない。何故ならば、id quod est contingens を主語としてもなお次の様な命題が考えられるからである。例えば

Socratem album futurum esse est possibile. (命題Ⅱ')

この命題も、contingens な命題とは言えないであろう。ところが Thomas が命題Ⅰで暗に主張しているのは前後の文脈から明らかに——ある命題が contingens であるのは、contingens なものがその命題の pars principalis である時である——という事である。問題が起きるのは、従って、'pars principalis' を '主語 (又は述語)' と解する場合である。

しかし、それでは 'pars principalis' に他の解釈を与え得るであろうか。Thomas⁽²⁾ に次のような用法が見られる。

Vel potest dici, quod sola nomina et verba sunt principales orationis partes.

しかし、命題Ⅰの 'pars principalis' を '名詞又は動詞' とすることは明らかにできない。なぜなら contingens なものは名詞や動詞ではないからである。他方、Petrus Hispanus⁽³⁾ は、主語と述語を確かに 'pars principalis' と呼んでいる。

Categorica <propositio> est illa que habet subiectum et predicatum principales partes sui,

そしてこの様な表現は、Boethius の次の個所を典拠としているのかも知れない。⁽⁴⁾

Termini sunt partes simplicis propositionis (= categoricae propositionis) in quibus dividitur principaliter propositio. (ここに 'termini' は明らかに、'主

語と述語'を指す)

これらの用例を見ると、⁽⁵⁾ 'pars principalis' はやはり '主語又は述語' を解すべきに思われる。しかるにその場合、命題Ⅱ'によって提起された問題を解決せねばならない。

我々はここで翻って、ある命題が contingens になるのはいかなる場合であるかを考えてみよう。contingens な命題の例として、命題Ⅴ

Socrates est albus.

を考える。すると明らかに、命題Ⅴが contingens であるのは、その主語又は述語 (Socrates, albus) が contingens であるからではなく、主語と述語の間になりたつ関係が contingens であるから、即ち、albus であることは Socrates にとって、その本質に属することではなく、付帯的なこと非必然的なことにすぎないから、に他ならない。事実、contingens なものとは、先に述べた如く、名辞が表わす所の物 (Ding) ではなく、res enuntiata なのである。

以上の考察から結論するに、Thomas が命題Ⅰの 'pars principalis' という語で述べたのは、厳密には、'pars principalis (主語と述語) の間の関係' とでも言うべき所であって、この点に於て Thomas の表現はルーズであった、と言えよう。

'materia verbi' について：次に、'materia verbi' という語の解釈について考察する。

先に引用した諸近代語訳は、ほぼ次の様な解釈をとっているように思われる。即ち——'contingens' という語は、命題を構成している所の単なる1要素、素材にすぎない。——この解釈は明らかに、命題Ⅰの 'contingens' を、'命題Ⅱの中の "contingens" という語' と解する事にに基づいている。しかるに我々はこの 'contingens' の解釈を採らないのであるから、先の諸近代語訳に従うわけにはいかない。又、'materia verbi' を '命題を構成する素材' と解する場合、'verbi' という語の意味がやや曖昧になることも注意せねばならない。

我々はここで再び Summa 本文に立ち帰って考察しよう。命題Ⅰに続いて次の様に述べられている。

Unde contingentia eius (i.e. materiae verbi) vel necessitas nihil refert ad hoc quod propositio sit necessaria vel contingens, vera vel falsa. Ita enim potest

esse verum me dixisse hominem esse asinum, sicut me dixisse Socratem currere,
vel Deum esse; et eadem ratio est de necessario et contingenti.

ここで、命題Ⅲに照応する3つの命題が与えられている。

ego dixi hominem esse asinum.

ego dixi Socratem currere.

ego dixi Deum esse.

そして、これらの命題が、その *materia verbi* である所のものの真偽に関りなく、真で（も偽でも）ありうること、が主張されている。その '*materia verbi* である所のもの' とは明らかに各々次の事である。

hominem esse asinum 〔これは明らかに偽〕

Socratem currere 〔これは真でも偽でもありうる〕

Deum esse 〔これは真〕

さて、これと同様の理由 *et eadem ratio* で、命題Ⅲ

Deus scivit esse futurum hoc contingens.

に於ても、その *materia verbi* が *contingens* であれ *necessarium* であれそれに関りなく、命題そのものが *contingens* であるか否かが定まる、と主張されている。先の例との照応から考えれば、従って命題Ⅲの *materia verbi* とは、'*contingens*' という語ではなく *esse futurum hoc contingens* であることが明らかであろう。

さらに、このことは、先に我々の得た結果、即ち、命題Ⅰの '*contingens*' は、'*命題Ⅲに於る“contingens”という語*' を指すのでも '*hoc <quod est> contingens*' を指すのでもなく、'*esse futurum hoc contingens*' を指すのである、という結果にも一致している。

以上の考察から結論するに、'*materia verbi*' は '*動詞の目的語又は目的句*' を意味している、と考えられる。但し、'*materia verbi*' がそのような意味で用いられている用例を、筆者は他に見出しえなかったこと、を認めておかねばならない。

最後に：日本語訳では、この個所に次の注⁽⁶⁾を付している。『命題の「素材」(*materia*)とは、いわゆる「変項」(*variable*)にあたる。これに対して、命題の「根源的な主要な部分」(*principalis pars*)とは「定項」(*constant*)をいう。いま、「非必然的」'*contingens*'なる語は変項として用いられているにすぎず、従ってそれは

命題そのものの「様相」(modus)を示すものではない——。』この注の意味はしかし、筆者には解しかねる。なぜなら、もしここで言われた‘定項・変項’が現代の命題論理でいわれるそれを指しているとするならば、変項とは、所謂命題変数のことであり、定項とは否定・連言・選言・含意及び様相記号等の論理記号のこととなる。ところが、もしそうだとするならば、第1に、命題Ⅲに於る‘contingens’という語は変項ではない。というよりむしろ、命題論理に於てはカテゴリーカルな命題を1つの分析不能な単位として扱うのであるから、その命題の構成要素(例えば今の場合の‘contingens’という語)は考慮の内に全く入らないのである。第2に、‘contingens’という語が定項の位置にあるような命題それ自身の様相は contingens であるとは言えない。例えば、命題

Socratem esse album est contingens.

を考えると、この命題は、

Socrates est albus.

という命題が contingens であることを表わしてはいるにしても、この命題それ自身が contingens であるとは考えられないのである。以上の2点の疑問を我々は先に引用した注に提起したい。

次に、第2の問題点たる‘composita’と‘divisa’の解釈に移る。問題は ad Ⅲにみえる次の個所である。

Unde et haec propositio, omne scitum a Deo necessarium est esse, consuevit distingui. Quia potest esse de re, vel de dicto. Si intelligatur de re, est divisa et falsa; et est sensus, omnis res quam Deus scit, est necessaria. Vel potest intelligi de dicto: et sic est composita et vera; et est sensus, hoc dictum, scitum a Deo esse, est necessarium.

諸近代語訳をみると、この個所の解釈は大きく2つのグループに分けられる。その1つは、

[E].....the proposition is taken independently of the fact of God’s knowing, and false.....

.....it is taken in conjunction with the fact of God’s knowing, and true,...

[F]..... la proposition est prise en un sens divisé¹ et elle est fause :.....

..... la proposition est prise en un sens composé² et elle est vraie;.....

仏訳にはさらに次の注がついている。

1. C'est-à-dire indépendamment de la condition: Si Dieu sait.....

2. C'est-à dire en liaison avec la condition: Etant donné que Dieu sait.....

この様な解釈をとる最大の根拠は恐らく、Summa 本文のすぐ前の段に次の様に論じられていることに存する、と思われる。

.....sed ea quae sunt scita a Deo, oportet esse necessaria secundum modum quo subsunt divinae scientiae,: non autem absolute, secundum quod in propriis causis considerantur.

ところがこの解釈に対し、独訳及び日本訳では、fallacia 論に於て、fallacia compositionis et divisionis として、当時既に technical なものとなっていた意味⁽⁷⁾に解釈している。

我々はこの第2の解釈を採ろう。というのは：まず、第1の解釈に対し実際に先に挙げた以外の大きな根拠がないとすれば、先の引用文中では、divisa に当るべき所が absolute という語が用いられていることから、これも大きな根拠と言えない事、(因に、'dividere' という語には、英仏訳の如く '神の知からは切り離して' 又は '神の知という観点からではなくそれ自体絶対的に' というニュアンスはなく、唯単に 'あるものを部分的に分ける' という程の意味しかないのではないかと思われる。) 次に、de re, de dicto の区別は、独訳・日本訳⁽⁸⁾に注されている通り、Thomas 自身に帰されている 'De Fallaciis'⁽⁹⁾ の中の他ならぬ de fallacia compositionis et divisionis の章にとり挙げられており、さらに Summa 本文にも引かれていた 'album possibile est esse nigrum' という例がここでもやはり引かれている (658節) ことなどが理由として挙げられよう。

それでは、componere, dividere のその technical な意味とはいかなるものか。

一般に命題は、いくつかの部分 i.e. 語 dictio からできているが、ある語 A と B を (もしそれが可能な場合) 文字通り componere あるいは dividere して、その命題の意味を把握すること、をそれぞれ compositio 或いは divisio と言う。先述の Thomas 'De Fallaciis' には次の例が挙げられている。

他方、先の dictum は、ratio totius dicti に、即ち dictum 全体が何ら dividere されずに、‘necessarium est’ の主語と考える事もできる。その場合は、‘omne scitum a Deo’ と ‘esse’ が componere されて把握されているから composita と言われる。その場合の意味は、‘全て神に知られている所の Sachverhalt は生起 esse する、という事は必然的である’ となり、真な命題となる。なぜなら、神の知はたとえ非必然的に生起するものについての知であっても決してあやまることがないからである。

注

(1) 以上に参照したのは次の諸訳である。

[D] Summa Theologica: Deutsch-lateinische Ausgabe, hrsg. vom Katholischen Akademikerverband. Bd. 2, Salzburg-heiderberg, 1934

[E] Summa Theologiae: Latin text with English translation, introduction, note, explanatory appendices, glossaries and indices, under the general editorship of Th. Gilby and T. C. O'Brien. vol. 4, New York-London, 1964

[F] Somme théologique: Texte Latin et la traduction française accompagnée de notes explicatives et d'appendices, par Les Dominicains Français, tom. 2, Paris, 1956 (3e éd.)

[S] Suma Teologica: Texto latino de la edición crítica Leonina. Traducción y anotaciones por una comisión de P. P. Dominicos presidida por F. B. Viejo, tomo 1, Madrid 1949

(2) In Peri Herm. L.1, 6; cf. In Aristotelis libros Peri-Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio,..... cura et studio R.M. Spiazzi, Taurini-Romae, 1964 (2nd ed.) p. 7

oratio は、通常 propositio 及び enuntiatio の類概念と考えられているが、この個所では Thomas はそれらを明確に区別していないように思われる。

(3) Peter of Spain, Tractatus called afterwards Summule Logicales, ed. L. M. de Rijk, 1972 Assen. p. 3²⁵⁻²⁶ < >内, 筆者補筆。

(4) De Syll. Cat., in Boethii Opera Omnia, P. L. 64, p. 798A ()内, 筆者。

(5) 但し, William of Sherwood は、主語と述語を ‘pars integralis’ と呼んでいる。cf. Die Introductiones in Logicam des Wilhelm von Shyreswood, ed. M. Grabmann; Sitzungsberichte der Bayerischen Akad. der Wiss., Phil.-Hist. Abt. Jg. 1937, Heft 10, München. p. 35¹⁶⁻¹⁷。そして他の13世紀の論理学綱要

書は、通常 *pars propositionis* を問わず、問うた場合も先述の Thomas と同様 Aristoteles, *De Int.* 冒頭に従って‘名詞・動詞’を挙げるのが普遍である。従って‘*pars principalis*’は *technical term* として安定したものではなかったと考えられる。

- (6) 「トマス・アクィナス 神学大全」第2冊, 1963, 東京。p 336, n. (109)
- (7) *fallacia comp. et div.* は Arist. *Soph. El.* c.20, 177^a33-b34 の発展したものである。
- (8) *ibid.* p 339, n (114), (115), 及び [D] p. 314, n. [12]。
- (9) *Opuscula Philosophica, cura et studio R. M. Spiazzi, Taurini-Romae 1954,* pp. 223-240. *fallacia comp. et div.* を扱っているのは Cap. 3. *ibid.* pp. 229-231.
- (10) ‘*dictum*’とは本来‘*enuntiabile, significata propositionis*’のことであった。しかし、ここでは具体的には不定詞句を表わしている。例えば、命題‘*homo est animal*’の *dictum* は‘*hominem esse animal*’である。‘*dictum*’という概念は、12世紀の論理学で大きな論争を惹き起こしたものであるが、13世紀にはこの様な形で残存するのみである。cf. Petrus Abaelardus, *Dialectica*, ed. by Rijk, 1956 Assen, Introduction p. XCII ff. Kretzmann; *Medieval Logicians on the Meaning of the propositio*; *J. of Philosophy*, 67 (1970) 等。
- (11) ‘*supponere*’は、この場合所謂 *suppositio* 論で用いられる意味ではなく、‘*supponere verbo*’で‘～という動詞の主語となる’の意味である。cf. L. M. de Lijk; *The Development of Suppositio naturalis in Mediaeval Logic I*; *Vivarium* 9 (1971) p. 81 n. 32